氏　　名	石川　智　（イシカワ　サトル）
本　　籍	東京都
学 位 の 種 類	博士（学術）
学 位 の 番 号	博甲第 113 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 20 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
学 位 論 文 題 目	福祉従事者のセルフ・コンパッションに関する研究
論 文 審 査 委 員	（主査）桜 美 林 大 学 教 授　鈴　木　　平
	（副査）桜 美 林 大 学 教 授　山　口　　創
	桜 美 林 大 学 教 授　松田チャップマン与理子
	東京成徳大学准教授　石 村　　郁 夫

論 文 審 査 報 告 書

論　文　目　次

第１章　福祉従事者を対象とした知見の整理 1

第１節　福祉従事者の業務的役割と社会的意義 1

第２節　福祉従事者の職場ストレッサーと精神的健康 4

第３節　福祉従事者のポジティブな心理的要因に着目する必要性 8

第４節　福祉従事者のポジティブな心理的要因に着目した研究の概観 19

第２章　セルフ・コンパッション研究の理論的背景と実証研究の概観 23

第１節　セルフ・コンパッションとは 23

第２節　セルフ・コンパッションに関する知見 25

第３節　福祉従事者を対象としたセルフ・コンパッションに関する知見.....28
第４節　福祉従事者のセルフ・コンパッションに着目することの意義.....31

第３章　本研究の目的と構成 37

第１節　本研究の目的と意義.....37
第２節　本研究の構成.....39

第４章　【研究 1】福祉従事者を対象とした JD-R モデルの検討 41

第１節　目的.....41
第２節　方法.....44
第３節　結果.....48
第４節　考察.....64

第 5 章　【研究 2】福祉従事者用コンパッション実践尺度の開発 および妥当性・信頼性の検証. 70

第１節　目的.....70
第２節　方法.....71
第３節　結果.....79
第４節　考察.....86

第６章　【研究 3】被援助者に対する福祉従事者のコンパッションに関する研究 ――職業性 WELL-BEING に着目して―― 93

第１節　目的.....93
第２節　方法.....96
第３節　結果.....98
第４節　考察.....106

第７章　福祉従事者のセルフ・コンパッション向上を目的とした 介入案作成の試み. . . . 111

第１節　目的.....111
第２節　介入プログラムの概要.....115
第３節　介入対象者.....118
第４節　本プログラムの実施意義と今後の展望.....120

第８章　総合考察. 122

第１節　本研究の目的と実証的研究の結果のまとめ.....122
第２節　本研究の示唆.....127
第３節　本研究における限界と今後の展望.....132
第４節　総括.....135

引用文献. 136

資料. 153

謝辞 **174**

論　文　要　旨

博士論文のテーマは、メンタルヘルスの悪化が危惧されている福祉従事者を対象としたセルフ・コンパッションに関する研究であった。近年、心理学で注目されているマインドフルネスに関するセルフ・コンパッションに注目し、福祉従事者を対象とした応用研究が行われた。セルフ・コンパッションに関する研究は増加しているが、福祉従事者を対象としたものはほとんど行われていないことが問題提起の背景にあった。セルフ・コンパッションが福祉従事者のメンタルヘルスに貢献することやワーク・エンゲージメントなどポジティブ要因の向上に寄与することを目的とした研究であった。

第一章では、福祉従事者のメンタルヘルスの問題についてレビューが行われており、福祉従事者のポジティブ要因に着目し、これを促進していくことの意義が述べられた。

第二章では、セルフ・コンパッションに関する先行研究のレビューが行われた。セルフ・コンパッションが精神的健康の改善に貢献するだけでなく、ワーク・エンゲージメントの向上にも関連していることが述べられていた。

第三章では、研究全体の意義と目的がまとめられていた。

第四章では、仕事の要求度―資源モデル（The Job Demands-Resources model：JD-R モデル）の個人資源としてセルフ・コンパッションに着目し、セルフ・コンパッションとモデル内の他の要因との関連が web 調査研究によって検討された。その結果、日本における福祉従事者は他の勤労者と比べると職業性ストレスが高く、セルフ・コンパッションが低いことが示され、そのことが精神的健康の悪化につながっている可能性が示唆された。また、セルフ・コンパッションの高い福祉従事者と低い福祉従事者では、ワーク・エンゲージメントを高めるプロセスが異なっていることが明らかになった。

第五章では、福祉従事者用コンパッション実践尺度の標準化が web 調査を元に行われた。探索的因子分析ならびに確証的因子分析から「無条件の優しさ」「感受性」「個別的支援」「苦痛軽減への動機づけ」「受容」の 5 因子計 16 項目から構成される尺度が作成され、信頼性と妥当性の検討が行われた。

第六章では、web 調査により、五章で作成された福祉従事者用コンパッション実践尺度とセルフ・コンパッション、職業性 well-being や仕事のパフォーマンスとの関連性について検討が行われた。ここでは、セルフ・コンパッションを高めることが職業性 well-being の向上や二次症状を低下させるなど、健康状態の改善に寄与する可能性が示された。また、セルフ・コンパッションを高めることが職業性 well-being の向上につながり、結果として福祉従事者の離職意図の低下につながることが示唆された。

第七章では、これまでの研究から得られた知見を元とした福祉従事者のセルフ・コンパッション向上のための介入実験案が作成された。

最後の第八章では、研究全体の総合考察が行われた。本博士論文の意義として、①福祉従事者のポジティブな要因に着目し，知見が得られたこと、②福祉従事者のセルフ・コンパッションに関する知見が得られたこと、③福祉従事者のセルフ・コンパッションは被援助者に対するコンパッションに基づく実践を高める可能性があること、④離職率の高い若手福祉従事者のセルフ・コンパッション向上を目的とした介入プログラム案が提示されたこと、といった知見がまとめられた。

論文審査要旨

博士論文全体については、審査委員全員一致で高く評価された。研究の背景、先行研究のレビューは大変丁寧にまとめられており、問題提起までのつながりがわかりやすく伝わっているという評価であった。調査研究部分では、分析が丁寧に行われていた点が高く評価された。多くの高度な統計手法が駆使されており、執筆者のこれまでの研究への真摯な取り組みが実を結んだと思われる。新型コロナウィルス感染拡大の影響を受けてしまったため、実際の介入実験に至ることはできなかったが、第七章で介入計画がまとめられており、今後の研究につながる知見が整理されていた。最後の総合考察も研究全体をうまくまとめたものであった。

審査委員からは大きな問題が指摘されることなく、論文審査は全員一致で合格となった。

口頭審査要旨

2022 年 1 月 16 日 15 時より、オンライン形式にて最終審査会がおこなわれた。前半の 30 分でパワーポイントを用いた口頭発表が行われ、後半の 30 分で質疑応答が行われた。口頭発表は時間通り 30 分でまとめられていた。発表内容の構成、わかりやすさ、発表する姿勢などは高く評価された。質疑応答では、質問や意見に対して丁寧、かつ真摯な姿勢で回答がされており、特に問題になるような指摘はなかった。

質疑応答後に、主査・副査による審査会がオンラインで行われた。審査の結果、主査・副査全員から、博士論文として高い評価が与えられ、主査・副査全員一致して博士論文の審査を合格とした。